

## 見逃し配信

五香 水貴

ただいまと言いながらリビングに入るも、里奈は無言のまま皿を洗い続けていた。流水音で俺の声が聞こえなかつたわけではない。意図的に無視しているのだ。多分、昼間に里奈から来ていた、「圭斗が初めて立つたの」という動画付きのメッセージを未読スルーしたことを怒つているのだろう。今日はうちの社の命運を賭けたビッグコンペのプレゼンと接待があるということは、事前に里奈にも話していた。仕方ないだろうという気持ちはあれど、このままこちらも意地を張つて、このギスギスとした空気を引きずるのも馬鹿馬鹿しい。ネクタイを緩めソファーに腰掛けると、ラグの上で遊んでいた圭斗に、立てるようになつたのかー！ パパにも見せてくれよー！ と話しかけるが、積み木のおもちゃを乱雑に投げる遊び繰り返す圭斗は俺の方を見向きもしない。短く溜め息をつき、スラックスのポケットからスマホを取り出して「見逃し配信」アプリを立ち上げる。

今日、地球上の全ての人間の行動は、高機能衛星によって全て可視化と記録化ができるようになつた。各国の政府によって管理されている個人情報のデータベースにそれぞれの動画は記録され、それと紐づいて開発された「見逃し配信」アプリでは、本人及び本人が許可した人間であれば、その動画をあとから見返すこともできるようになつていて。家の鍵を掛け忘れていないか確認したり、離れて暮らす親の健康状態を把握したり、はたまた事件の冤罪の証明まで、行動動画をあとから見返せることには様々なメリットがあつた。

生後六ヶ月の圭斗の動画の公開範囲は、親である里奈と俺の同意によつて、里奈と俺のみが見ることができるように設定されていた。アプリ上の「杉村圭斗」のアイコンをクリックして動画のタイムラインを今日の十二時半頃に合わせると、頭上、斜め上の辺りからとらえられた圭斗の様子がスマホ画面に映し出される。ラグの上に座り込んでいた圭斗は、テレビ画面に映るお気に入りのアニメキャラに興奮するように笑顔で両腕を上下させたあと、そばにあつたローテーブルの端をむんずと掴み、そのままゆっくりと立ち上がりてテレビに近づくと、二、三歩歩いてから尻もちをついてまたラグの上に腰を下ろした。圭斗が立つたのを見て急いでスマホの動画をまわしていたのであろう里奈が、スマホをソファーの上に放り投げ、圭斗を抱きしめながら何やら笑顔で話かけている。

動画をオフにして、画面ではなく、目の前に存在する圭斗に、すごいなあ！ ともう一度話かけるが、圭斗はやはりおもちゃに夢中だ。

洗い物を終えてキッキンから出てきた里奈が、圭斗、もうねんねの時間だよ、と言つて圭斗を抱き上げると、おもちゃを掴み損ねた圭斗は不服そうにぐずり声をあげる。圭斗の

背中を軽く叩きながら寝室へ向かう里奈に、俺、明日資料作りでちょっと早く出るんだけど、と声をかけると、じゃあ今日はリビングで寝て。圭斗まだ夜中も起きちゃうからと里奈は言い残し、二人は寝室へと消えていった。

翌朝、家を出る前に寝室に立ち寄り、ベッドで眠る里奈と圭斗の顔を眺める。いつきますと独り言ちるように声をかけ、コンビニで自分の朝飯を買ってから会社へと向かつた。

先方からのリライト要請に三度応えて作り直した企画書をメールで送つてから帰宅する頃には、午前零時を回っていた。二人はもう寝ているだろうと静かに鍵を開け、足音をたてないように廊下を進むが、妙な違和感を覚える。俺は意図して音を立てないようにしているが、そもそもこの家から全ての物音が消え去つてしまつたかのようを感じた。鞄を廊下に落とし、走つて寝室の扉を開けるが、二人の姿はそこにはない。来た道を戻りありとあらゆる扉を開け、リビングも、浴室も、トイレも確認するが、この家のどこにも人影はなかった。何なんだよ！ と声を荒げ、廊下に放り投げたままの鞄を漁つてスマホを取り出すと、微かに震える指で「見逃し配信」アプリを立ち上げる。「杉村里奈」と書かれたアイコンをクリックするが、「このページは非公開です」というエラー・ポップが現れ、里奈の動画ページは強制的にシャットダウンされた。クソッ！ と叫んで「杉村圭斗」のページを開くと、タイムラインを現時点に合わせる。古びた布団で眠る圭斗の姿と、半分だけ映る里奈の寝顔が画面に表示された。ここ何年も行つていないので確証はないが、この布団には見覚えがある。二人は多分、里奈の実家にいるのだろう。事件に巻き込まれたわけではないことに安堵しながらも、帰るならそう言つておけよと吐き捨ててタイムラインのカーソルを現時点から遡らせていくと、夕刻ごろ、他所行きの服に着替えた一人がうちの玄関で靴を履くシーンが映し出された。不意に斜め上を見上げた里奈が何か言つているような気がする。え？ 何？ と呟いてスマホのミュートを解除し、音量を上げた。

「悠馬、見てる？ あなたとはもうリアルを共有できない。これからもずっとそうやって私たちのこと見逃して生きていって」

そう言つた里奈は扉を開け、静かに自宅をあとにした。

爆発寸前だった怒りが急速に冷めていく。圭斗の動画をそつと閉じて、「杉村悠馬」の動画の再生を始めた。現時点の映像では、家のソファーの上で、一人ぼつんと座り込む俺の姿が映し出されている。動画のタイムラインを三年前の六月十二日に合わせた。里奈の誕生日であり、俺たちの結婚式の日だ。みんなから祝福されて照れる俺と里奈の顔は、今より幾分幼い。それ以降の動画は、何かバグでも起きたんじゃないかと思うくらい、同じ映像の繰り返しだった。朝起きて、職場に行き、仕事をして、帰つて、寝る。百倍速に設

定し直した動画の中で、忙せわしなく同じことを繰り返す俺の様子はコントのようにも見えた。

自分の動画を閉じて再び圭斗の動画を開くと、「最初からダイジェスト再生」の設定をして再生ボタンを押す。数秒のブラックアウトのあと、分娩台の手摺を掴んでうめき声を上げる里奈の姿がフェードドインする。数日に及ぶ陣痛の末、圭斗は産まれた。里奈は涙を流して圭斗を抱き上げる。その場に俺はない。その日たまたま出張が入っていて、どうしても直ぐに病院へ駆けつけることができなかつた。惚けたまま動画を流し続ける。圭斗にミルクをあげる里奈、圭斗の吐き戻しを掃除する里奈、圭斗を沐浴させる里奈、圭斗と公園で遊ぶ里奈、圭斗を抱っこして買い物に行く里奈、眠そうな目をこすつて夜泣きをする圭斗をあやす里奈……。二人が一緒に生活をしてきた六か月分の動画が足早に流れ、最後にさつき見た布団で眠る二人の寝顔で動画は終わつた。もう朝になつていた。「見越し配信」アプリを切つてメールアプリを立ち上げると、宛名に部長を呼び出して本文を打ち込む。

「大変申し訳ございませんが、本日、急用のためお休みをいただき存じます」

それだけ打つて送信をすると、急いで私服に着替えて財布を掴んだ。家の前の大通りに出ると大手を振つてタクシーを捕まえる。里奈の実家の住所を告げ、違反にならない程度で良いんで、急いで向かつてくださいと願い出た。